

今月の谷口雅春先生のお言葉

愛の表現によって本来の神の子が現れる

人間はみな天才をもつて生まれてきている

われわれを神が造った。神と呼ぶのが嫌な者は生命と  
 いても好い。(中略)

われわれの内に無限が宿っている。この無限を掘り出  
 せば人間は皆な天才となるのだ。

天才を、人間は皆もつて生れて来ているのだ。それに  
 人間は皆な天才にはならない。それは不合理だ。その不  
 合理は誰がするか。人間が真理を知らないからだ。親た  
 るものが真理を知らないからだ。ダイヤモンドを有つて

いながら石だと思つて捨てて顧みないからだ。

人間を信ぜよ。神の創造を信ぜよ、生れたままの人間  
 を信ぜよ、それは幼児だ。

幼児に宿っている天才はまだ彫琢しないダイヤモンド  
 だ。瑾のつかない高貴だ。(中略)

天才の閃めきが吾が子にあらわれないからとて吾が子  
 を軽蔑するものは、生命を軽蔑するものだ。神を軽蔑す  
 るものだ。子供をわが子だと思ふな。子供の生命の背後  
 には無限生命がある。神がある。明日火に投げ入れらる  
 べき野の草の小さな花にすら、神でなければ造られない  
 装いがあることを知るものは辛いだ。況んや造られたる

ものの主位に位する人間の子供の天才を疑うな。

子供の天才を生長させるために必要な根本事項は神の創造に対する信頼だ。親はわが子を神の創造だと信じ、出来るだけ子供自身が神の創造を自覚し神の創造をはずかshめてはならないという魂の高貴さを養成するように努力しなければならないのだ。

(新編『生命の真相』第22巻74〜77頁)

## 親に愛されたいという子供の心

どなたでも子供を憎むという人はないのですが、子供を愛している表現が少ない時には本当に愛してくれていないのだという親に対する恨みがましい気持ちが出てくるものがあります。こういう大きな大人でも、奥さまからちよつと優しく言ってくれると嬉しいのです。いわんや子供というものは親に愛されるということが、もう一番の楽しみなのです。親に愛されている子供は、親のためなら、親の喜ぶことなら、たとひ火の中水の中に入っても、命を棄てても厭わぬという感激をもつのです。そ

ういう親をもつ子は親に喜ばれるためにいくらでも善いことをいたします。ところが親が子を愛しているということ言葉を言葉にも表情にも表現しないであまり仕事が忙しいとか、何か自分にくしゃくしゃする事件があった時などに子供につっけんどんに当たる——それがいけないのです。愛は心のうちにもついても表現してもらわなければ愛してもらったような気がしないのです。心の中に愛があっても、顔でしかめ面しているとして「どうもうちのお父さんはこわい」とか「お母さんは叱ってばかりいる」とか思うようになるのです。これに反して言葉でも、形でも愛してやるといようにいたしますと、必ず子供は親に従順になってきまして、親がこうなつてほしいというように必ず子供から進んでそうなつてくれるのであります。

(『生命の真相』頭注版第40巻37〜38頁)

## 親が愛を表現することで子供の神性があらわれる

よく世間に不良児童というものがありますが、不良児童ができた根本は親に対する憎みというものから出発し

ていることが多いのです。子供が親を憎むのです。親を憎むような子供があるかと不思議がられる人があるかもしれませんが、憎みというものは愛の裏表でありまして、愛しているからこそ憎むということにもなるのであります。誰でも、隣の奥さんが間男しても憎いとは思わないけれども、自分の奥さんが間男したら憎いと思う。これはやはり自分の奥さんを愛しているから憎いと思うのです。子供が親を憎むのは、子供は親から愛されたい、また自分は親を愛したいという本能があるために、親の方は子供を愛しているのだけれども、形や言葉の上でガミガミ叱りつけるというふうなことをやっているのと、わしの親は子を愛していないと思ってしまうのです。すると、子の親に対する愛が、今度は憎みに変わってくるのであります。そして親を憎むというふうになるのです。子が親を憎みはじめたら、親を困らせてやろうというようになってきまして今まで親を喜ばせてやろうという素直な念であったのが逆になって、親のいやがることをしてやろう、親が子供に「この学校に入学してほしい」と思ったらよけい落第してやろう、「遊びに行く

な」と言ったらよけい遊びに行つてやろうというふうになるので、親の意向に反対反対に出ようとするというふうになってくるのです。これが不良少年少女、不良青年であります。子供が親から愛されたい欲望を持ちながら、愛しているという表現が足りないために反対になって、愛が憎みに変じまして、親を憎むということになるのは、ここの心理を知らないからであります。本来、不良児童というものはない。愛があべこべになって方向がちがった時にできるのです。ですから、優しい素直ない子供をこしらえようと思えば、親が本当に子供を愛しているぞということ、言葉でもって、微笑でもって、態度でもって、行ないでもって、実際にそれを示すことにしましたならば、必ず子供は本来神の子なので、善いから、善良なる模範児童がでかあるのであります。

〔生命の實相〕頭注版第40巻38〜39頁

